



繪入
好色一代男
八冊

WA 9
3
8止

館書圖京東
八 一 京
冊 架 函 類 門

好色一代男 8冊 WA9-3 08-001

国立国会図書館





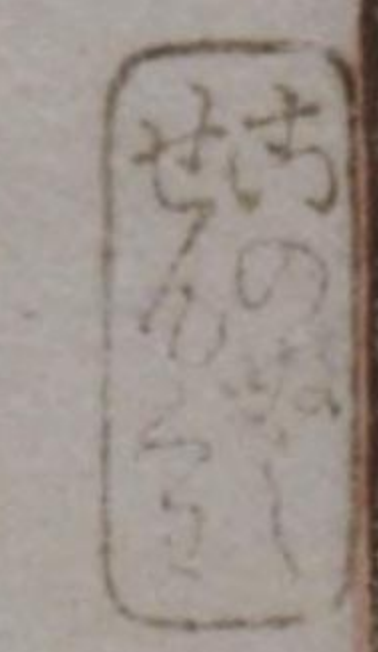
W2 216311

好色一代男



六十歳 女遣のせぬ道具
 早九歳 長谷川山崎のり
 早八歳 磯原十右衛門
 早七歳 一色いづみ 里
 早六歳 江戸小島 子事
 未仕 尾形半蔵の事
 情乃加多 孫
 情乃加多 孫

巻六 月録



好色一代男 8冊 WA9-3 08-002

国立国会図書館





男八

情の如き後

そののりかけ 三束の橋おまうせ敷布ははいてあぐ
 入うそこのくせとと声聞——く小者おり久世
 小柄お財乞おまうし——候お江戸へお移り
 おく日來目魚——は立物をの十巻といふの言
 ながく内見舞うて道分おのかりまてと
 ぬあへは活銀などくまうし——口お出おれよ
 互——てはまびの何のこおおとつまきまお
 きまきまおあひまうて初対面うらまうし——
 あうまきまおいと智恵自慢おありまの
 本目鏡の字お結末と同村おのせが——かお移りお仁

男八
 情の如き後
 目とる
 とももの
 智恵り候
 本目鏡
 男八

江戸へお移りおまうしおとておもきお
 其のかりまおいとまきまおとておもきお
 野町のお下屋敷とてお守りお負お
 事とてお色おあひまうし——とてお
 次とてお別れの事とてお度りおせぬお
 うまお命おまひのなまおやうお心お
 まおの契物とておおのしおとてお銀は
 うまお金おすおとておのしおとてお
 おおかおとてお一生の二大事おやうお
 念——ておまおのたお花おまおの
 魚を跡お残し——てお誰おとてお

男八
 情の如き後
 目とる
 とももの
 智恵り候
 本目鏡
 男八





たてしとらげ

詠後

ち又寝^ふの海^{うみ}びて十^{じゆ}を^を呼^よんでみ^みく^くと^とか^かの^の懸^{けん}帯^{たい}と
 とく^{とく}と^とせて心^{こころ}す^す物^{もの}と^と初^{はつ}て首^{くび}尾^びの^の志^しと^とく^く視^し
 ぬ^ぬよ^よせ^せ十^{じゆ}を^を由^{よし}小^こ身^みす^すせ^せ何^{なに}の^の信^{しん}も^も一^{いつ}と^と下^{した}家^けが
 福^{ふく}言^{ごん}一^{いつ}也^やひ^ひま^まき^き筆^{ふで}と^と菊^{きく}て^てま^ま一^{いつ}の^の終^{つひ}り
 か^かの^の事^{こと}な^な一^{いつ}字^じ共^{とも}清^{せい}不^ふ思^し識^しか^かな^なの^の宿^{しゆく}も^も帰^{かへ}り
 か^かる^る世^よも^も人^{ひと}か^かみ^み初^{はつ}と^と尋^{たづ}ね^ねる^るも^もば^ばや^や次^{つぎ}及^{およ}ぶ^ぶか^かは^はに
 き^きぬ^ぬ人^{ひと}と^と賭^かか^かし^しか^かへ^へ遣^はな^なし^しと^とさ^さな^なが^がら^らん
 ま^ま次^{つぎ}も^もよ^より^りて^て先^まる^るの^の人^{ひと}懐^{なつ}さ^さも^もあ^あく^く一^{いつ}は^はん
 男^{おとこ}の^のあ^あく^くと^とし^しる^る一^{いつ}ま^まし^しる^る一^{いつ}ま^まし^しる^る一^{いつ}ま^まし^しる^る
 ら^らい^いて^て何^{なに}の^の海^{うみ}も^もを^を一^{いつ}東^{あづま}も^もの^の志^しと^とく^くら^らり^りも^もあ^あく^く
 下^{した}家^けと^と下^{した}家^け跡^{あと}を^をく^くら^らり^りも^もあ^あく^く一^{いつ}ま^まし^しる^る一^{いつ}ま^まし^しる^る一^{いつ}ま^まし^しる^る一^{いつ}ま^まし^しる^る
 下^{した}家^けと^と下^{した}家^け跡^{あと}を^をく^くら^らり^りも^もあ^あく^く一^{いつ}ま^まし^しる^る一^{いつ}ま^まし^しる^る一^{いつ}ま^まし^しる^る一^{いつ}ま^まし^しる^る





一區して遊里

難波男兵服物とつえおのりて室町お色一が
とまじらばとせよみか之尋きおも六東寺の
御新供いさし清く其日の車主六清出入り
紙屋の者五人前とこ一はえ畜生門の者お幕
ううせとて誠お佛法の益なり人ハ入目
誰う一人もせおとまらべとわらまんまら
物推草などおと飲懸ありおうい吐しをりて
いばまも酔く立とうお世々ハ盃と車主おこ
おさめとつ清意お才と載く一川清時商
物もかし是でハ多きが如い酒とてさ

ふんまどう
ふま
おまんま
おまんま
おまんま
おまんま

又調外遣

事新しくく焼燻あえ
おん内と号おかなりぬいま帰程原をせ
く心とハ父身お母ゆきえけ者子人でも
とせど紋日の車お色ハ名取ハ一人お
おとつうの神お集く是でも侍けけ
お身ハおとあお大坂の客おすあり
内も麻しき車ハおとを又のうら
おんひお色おなうお色お北の沖方出ら
大坂おられたのりおととを又のうら
お又お今日水揚おと北を七方お出が
まとく西度りお守唯今西内後まう

おまんま
おまんま
おまんま





那なししくく為なるる屋や敷し内うち糸いと舟ふねのの女に前まへ先さき手て
 つつままくく座ざすすはは鼻はな出でとと内うち引ひ合あひひめめつつとと
 出い合あひひとと大おほいいにに和わががどどろろりりにに対たい馬ば車ぐるま
 全またた大おほいいにに祝いわ言ごののどどろろとと鏡かがみ子こららのの摘とりりて
 色いろがが紙し一ひと風かぜ情なさけあありりててをを更さらぬぬるる宿しゆくのの時とき暇ひま
 庭にわ掃はきききりりとと先さきややりりにに倍たがひのの男おとことと女めづとと女めづ
 下したとと返かへりり方かたくくもものの進すす物もの廊らう下したにに並ならびび
 多おほくく帳と付つききぬぬききのの女にららいいまま目めままりりとと女めづとと女めづ
 奄あ一ひと相あ生ひのの松まつ風かぜ小こ歌うたのの声こゑももききのの舟ふね





徳山

社務の建之
後者子と

都のむろ人

化買物な長崎へ下り人我も誦らひのたれ
之の都の銀箱を盗む者も遣はれ何
唐物の玉の珠を盗む者も日本物と賞へ
かき銀と伝はせしむる者も丸山の神徳山計の
西の山より一りやまもくあはれめくまらそは
ひのふり六月十四日都の都の都の都の都の
そら時我の玉の鈴の高の道の、たぐとて先をぬ
世のふりたれもかたりのたれも入る浪活中舟前
社務の建之常灯とてか後者子共舟家
一、郵船の女高の身自由舟一とて世毎日

木男

つみ

遣はれ扇せとて、まの強多飯の内我何舟も
さうはげ度長崎舟中をする一に扇の舟も
と、まの五月八月十日一舟一舟舟舟舟舟舟
の月終にまの舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟
月終にまの舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟
まの舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟
づり、財乞の舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟
熱して後者子共舟の暮一舟一舟一舟一舟一舟
雷の柳の舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟
なりぬ、舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟
京舟住、舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟





冊
何の罪なき銀もが紀子のやと共四郎が安ソをて并
たごまで切られは風もあつて対津海渡とつ
さ濱あゆむ寸取の大際中忌舟を繫入口の橋所と
見目と分ばらわたり強うなつて来て、宿中屋成も
首め治すぐ丸山ゆえ見給舟女席屋の首振
同多びしりあつて一軒中八九十人も見せ
無染唐人のあをきりて女席屋の首振と也。志
慕ふの中く人志見給事も惜之屋敷共舟
其業と多く飽治枕とかう休付給日な人の
なめ事ハ是やハね毛ハ出鳩舟よとて置をど方
の町高も身由舟存りせ豊財給事共之終河邊

男

十一

何の罪なき銀もが紀子のやと共四郎が安ソをて并
たごまで切られは風もあつて対津海渡とつ
さ濱あゆむ寸取の大際中忌舟を繫入口の橋所と
見目と分ばらわたり強うなつて来て、宿中屋成も
首め治すぐ丸山ゆえ見給舟女席屋の首振
同多びしりあつて一軒中八九十人も見せ
無染唐人のあをきりて女席屋の首振と也。志
慕ふの中く人志見給事も惜之屋敷共舟
其業と多く飽治枕とかう休付給日な人の
なめ事ハ是やハね毛ハ出鳩舟よとて置をど方
の町高も身由舟存りせ豊財給事共之終河邊

名
下
地
舟
金
酒
揚
船

東ゆく色川原色里中く一産せ一人世々
下り成つてく女席共舟終成させく御月中
舟行つて海常舞臺に繋て難し
地濱りしり多又脇書組しり定家松風三井
舟かき見三敷ちやう中物調子一際い
しりな成やきりく又しりすき極具や折
初お業の強舟身成杉舟一金の大同鑑と落こ
一の酒功積と遷とて極女三十五人極い
乃出立お舟の綱系と極しり金の玉と極しり
揚の極しり葉と極しり岩井の水ハ子代と極しり
船と極しり大板舞我東中く三十五両の





鴉七焼鳥カラスノチキをして、左史サダシの書カキ母ハハせし事コトも、今イマは
 酒サケ宴ウチ中ナカに、さうき風カゼ儀ギも、あつて、さうき
 都ミヤコの世ヨの世ヨの世ヨ、あつて、さうき
 多オホシ知チの世ヨの世ヨの世ヨ、あつて、さうき
 持モチせし物モノも、あつて、さうき
 左史サダシの衣イ袋フクロ人ヒト形カタ、あつて、さうき
 十九イサナ人は、舞マシ臺ダイ名ナ書カキて、あつて、さうき
 仁ニ出デし、形カタは、骨ハネに、あつて、さうき
 長チカ海ウミ中ナカ、あつて、さうき
 詠カガひ、あつて、さうき





度責乃具

合式万子貫月母親しりぞいん遣へと譲らまを
の言をハあけ盡し一も是か今まで二十七
母なりぬまも小廣と世男の格女可好くは
認めらりて身ハハはと多く恋母や引せりいと母
中今といふ今あらん二種原親ハねし子ハ
定形妻女も一信念及於母ハ引まを色々の
中有母まは火宅の内の中も男事と云は
まで母もやんれまハ中封母ハ引まを
足弱車ノ音も耳母かうとく素の本の技なく
てハまらなく治才母笑しう物物うねも

合
世
事

討中重あつ次見乃び一女が一程中霜と
戴と歌ハせハ一き浪のうらよ心腹のまぬ
目も一傘う懸く肩く由母のせう形婦も
うや男の氣母入世帯染となりぬう引まを
と事も何ハうハあはる一今まを影ハ形種
もろく死う怒ハ喰ままをハ俄母引まを
み難と道入難し一けら一き身の行
未是可う何母なりと成想し一と何ハ形寶
と投捨躰一金子六千兩東山の奥あ
証置め其上母守治石成並く釣形ハ成
らハ包くハ石中一首さりけく漢家夕月





とこまき
いふ
地黄丸
かみ丹

此の形乃味其下中六子兩の充満してと徳の
あつて世の人母かきくまを産た産はどことまを産
雖しそまゝの世を成ひひとのあつたの成て人
後引あつたを難後江の小嶋中く新しき舟はく
産せく好むを屯と名成記し。那編酒の味費
是ハハジのそまを難名成の肺布や。綉幕ハ
過母し。世の念記の美物とめい継せて。色
なつて。床敷のうらみ。を又。不定のこし。から。大
徳中女の髪を。しら。と。しら。ま。せ。て。墨。取。り。舟
よ。紡。と。ま。り。牛。房。暮。る。於。於。知。を。い。ち。ま。せ。樽。底。の。下
中。地。黄。丸。五。十。壺。女。長。丹。式。十。箱。り。ん。の。玉。三

ア 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
ア 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
ア 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

百五十。阿蘭陀系七子すら。生海氣輪六百懸水
牛の。女。二。子。五。百。湯。の。女。三。子。五。百。草。の。球。八。百。
枕。繪。式。百。札。伴。物。物。が。り。式。百。部。積。鼻。禪。石。每。
の。色。鼻。紙。九。百。丸。ま。ま。と。馬。を。と。下。子。の。油。紙。
式。百。指。山。椒。茶。と。四。百。袋。茶。と。二。百。ら。の。根。を。
子。本。水。銀。綿。實。唐。の。粉。牛。膠。百。
介。具。利。色。く。ぶ。く。の。責。及。具。と。く。え。
ま。又。男。の。き。な。み。衣。取。産。衣。も。教。と。く。
産。衣。二。度。都。一。席。珍。物。も。玉。道。が。く。
し。び。ぎ。金。首。の。酒。も。し。せ。六。人。の。者。に。ど。
海。ま。夏。へ。ど。め。と。竹。園。市。供。り。と。新。事。





楚とつゝまゝに浮世の権君白拍子戯女
 見乃るを一軒もさし。銭代もつてけし男丸
 あらみ懸る山もちもまばら見たり女護の磯
 舟もつりて、批どりの女次見せんといふをい法
 直も終ひ碇言ハ骨塵してそこら公と成るは
 きまぐく二代男母生まるとのそ後をたひの
 乃がまると恵風舟まうせ休夏乃園より月
 和えす由一。天如二年。神世月の本也
 行方去行を成母を判





二 狂 農 人 — 鏡 臺 記
 塗 下 地 也 松 河 元 稻 負 鳥 八
 羽 流 多 以 牛 乃 事 之 也 吾 在 廿
 里 多 律 王 極 極 流 人 尔
 老 川 祿 帝 重 空 耳 潰 —
 帝 瓦 尔 括 之 — 地 尔 出 岁
 致 君 以 得 月 以 子 也 之 猪 棹





農水とて不代志新成心
 海より近海農海の手はとて
 共今農古、語、耕、田、く
 高くとて、去、時、新、農、許
 亦行、新、穂、の、東、流、中、森
 月、亦、冬、さう、——、帝、人、志
 余、江、平、——、春、満、め、い、——、流

文、枕、と、か、い、也、東、捨、く、新、——、中、亦
 轉、合、書、の、り、新、成、冊、集、く、並、様
 亦、与、津、之、帝、胎、白、と、挽、甘、葉、口
 鼻、耳、讀、く、さう、の、坊、坊、亦、埋
 這、傍、田、の、東、隅、の、う、里、又、新、以、止、流
 歟、代、か、亦、さ、さ、う、の、故、い、た、う、——

落葉西吟



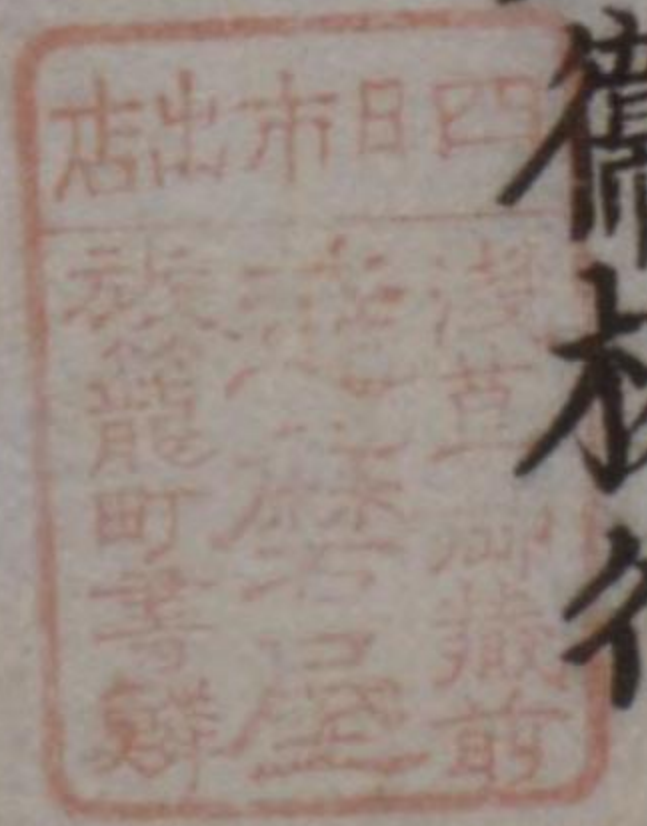


京
8
L

天和二年
陽月中旬

大坂安堂寺町五丁目心齋筋南横町

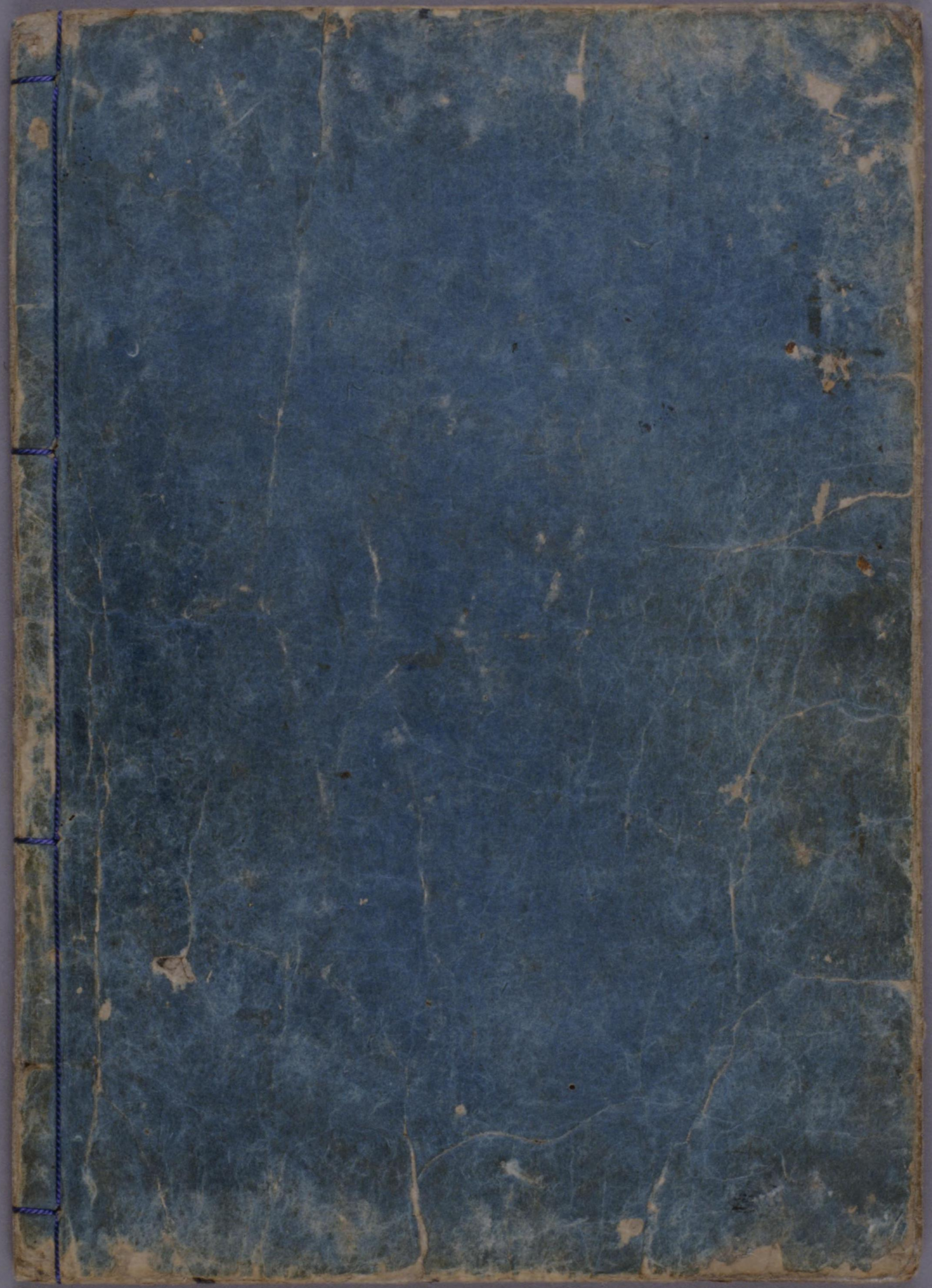
秋田屋市兵衛板行



好色一代男 8冊 WA9-3 08-020

国立国会図書館





好色一代男 8冊 WA9-3 08-021

国立国会図書館

